

主な土壌消毒剤の種類と特性

令和7年4月 JA全農ちば 営農支援課

薬剤名	D－D	ドクロール	ソイリーン	ガスタード微粒剤	ディ・トラベックス油剤	キルパー	
ガスの種類	D－D	クロルピクリン	D－D クロルピクリン	M I T C	D－D M I T C	M I T C	
同じグループの薬剤	D C油剤・テロン	クロールピクリン・クロピク80・ドジョウピクリン	ダブルストッパー	バスアミド微粒剤	トラベックスサイド油剤	N C S	
ガス抜き	有り						
※10a使用量	15～20L	20～30L (1穴あたり2～3ml)	20～30L	20～30kg	30～40L	60L	前作終了後から播種又は定植の15日前まで原液として40～60L/10a
※主な使用場面	主に施設、露地とも線虫防除に使用。	主に土壌病害防除に使用。	線虫と土壌病害が併発している場合に使用。	主に土壌病害、苗床の殺草対策。	線虫と土壌病害が併発している場合に使用。	主に土壌病害、苗床の殺草対策。	古株枯死対策。早期に作物が枯れることによる病害虫まん延防止。
使用のポイント	線虫による被害が大きい場合は、ネマトリンエース粒剤等を併用する。	剤特有の刺激臭が強く、 <u>消毒後の被覆は必須。住宅地周辺での使用を避ける</u> 。高温期はガス化が早いため、気温の低い時に作業を行う。	D－Dとクロルピクリンの混合剤。線虫＋病害の同時防除が可能。消毒後の被覆は必須。住宅地周辺での使用を避ける。高温期はガス化が早いため、気温の低い時に作業を行う。	土壌中の水分により分解されてガス化するため、処理前に水分調整を行う。低温では、ガス化しにくい。ため露地での使用は注意を要する。	D－Dとトラベックスサイドの混合剤。ガスタードなどと同様に低温期はややガス化しにくい。	土壌中の水分により分解されてガス化するため、処理前に水分調整を行う。液剤なので水で希釈する方法も可能。低温期はややガス化しにくい。	作後のベット内に、液肥混入器を用いて灌水処理する。灌水量は原液の100倍が目安。薬液600l処理の場合6000lの水で灌水する。処理後ベット・作物を片付けガス抜き。

※ 各薬剤使用時には各作物の使用基準(適用作物、使用量等)に従って下さい。

【土壌消毒の効果を上げるには】

①被害残渣は、できるだけ圃場外に持ち出す。 ②適度な土壌水分時に薬剤処理。 ③ビニール被覆を行う。クロールピクリン含有剤は必須。

④ガス抜き前にトラクター、ロータリーの泥を落とし、未消毒土の混入を防止。 ⑤未熟な堆肥(未熟有機物)は土壌病害が増加。